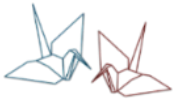


未来に向かって伸びる鶴嶺の子 鶴小だより 夏休み号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和7年7月18日発行



子育てのヒント

「子どもを守る会」という、子どもの見守りに関わってくださっている地域等の方々の集まりに出席しました。皆さんに日頃のお礼をして、それぞれの方のお話を伺いました。

その中に、こんなお話をしてくださった方がいらっしゃいました。「自分は、コミセンで働いているのだが、部屋を使った後の子どもたちのゴミの始末等が悪い！やりたい放題だと感じることもある。」とのことでした。僕は、お叱りだなあと真摯に受け止めていたのですが、その方がお話しされたかったのは、別のことでした。「やっぱり、しつけ等、子どもの教育は大事だ。嫌なおじいさん（そんな風には見えない若々しい方です。）と思われるも、きちんと伝え続ける必要があると思っている。」とお話しされたのです。その方だけでなく、似たようなエピソードをお話しくださって、そのことで子どもとつながったという経験をお伝えいただいた方もいらっしゃいました。僕は、とってもうれしくなりました。

話は変わりますが、保護者の皆さんは、「子育て」にストレスを感じますか？ある調査では、日本人の7割の方がストレスを感じると答えたそうです。では、どうしてそう感じてしまうのでしょうか。その最たる理由は、子育ての有り様の大きな変化だと考えます。

人は、身体的な強さよりも、社会化する強さを選択して進化してきたと言われています。野生の動物は成長するのにともない、周囲に対する注意深さや身体の強さを身に付けていきます。一方人間は、他者と協力したり話し合ったりすることがよりできるようになっていきます。野性的な目線で考えたら、見ず知らずの相手と気安くコミュニケーションするなんて愚の骨頂、危なくて仕方ありません。しかし、集団としての強さ、社会化することによって生まれる「よさ」を人間は選んで、それに沿って進化したのです。

自分たちの種を繁栄させるために、社会化することを是とした人類は、子育ても当然社会の中で行ってきました。コミュニティの構成員が、それぞれに関わる事で子どもを育ててきたのです。「協働」の子育てです。この「協働」の子育てにおいては、1人の子どもに対して、血縁以外の人間が、30人程度は日常的に関わる必要があるとも言われています。

今お話しした、この「子育て」の姿と、今皆さん

がしている「子育て」は、あまりにかけ離れていませんか。「個育て」と言って、たった1人で全部の責任を負うような状況の方も多いのではないかと想像します。もともと「子育て」とは、社会の責任として、すべての大人が当事者としての責任をもって関わる事だったのです。色んな人が当たり前に関わってくれる中での「子育て」とすべての責任を自分が問われる「個育て」では、親の負担は大幅に違います。

僕がうれしかった訳が分かりましたか。この鶴嶺の地域は、「何でちゃんと教育してないんだ！！」と責任を親や学校に投げてしまわずに、自分にも「子育て」の責任があるとしっかり自覚されて、地域の大人として関わってくださる方々がいるということを改めて、知ることができたからです。これからの教育を語る時、親も含めて様々な大人が、どのように子どもたちに関わるか、そういう機会を日常的にどう設けていくのかを本気で考える必要があると、僕は思っているのです。

保護者の皆さんは、昔に比べ難しい中で「子育て」をされています。苦しい思いの時もあると思います。けれど、先の話のように鶴嶺には、大人としての責任を果たそうと考えてくださる、地域の人があります。同じように自分の子どもだけでなく、様々な子どもたちの力になりたいと思われている、同じ保護者の仲間がいます。「1人で頑張る必要は、元々ない」のです。周りからサポートしてもらうことは当たり前です。ヘルプを出すことは恥ずかしいことでも、無責任なことでもありません。心配なことは、どうぞ学校にご相談ください。一緒に考えていきましょう。

最後に、そんな大変な中で、お子さんを大切に育てていらっしゃる保護者の皆さんに、子育てのヒントを1つだけお伝えします。それは、子育ての目的をはっきりするということです。

子育てには様々な側面があって、どうしてもあれもこれもとなりがちです。どう育てればよいのかと悩むのは、至極当然のことです。何のために子育てするのか？！ここをブレずにもつだけで、楽になるはずですよ。子育ての目的は「自律」です。

「自分で考えて、判断して、行動できる力」をつけることです。教えることではありません。「子ども自ら、もともと持っている力」を伸ばすスタンスです。お家の中で「～しなさい。」「～してはダメ」等、指示する言葉が多くないですか。その関わりは、子どもが自己選択自己決定するチャンスを奪っているかもしれません。目の前の子どもに「どうしたい？」と問うことから始めませんか。